

賈似道略傳

—支那古今人物略傳(三)—

宮崎市定

—

南宋時代の末つ方、湖州德清縣に黃氏、胡氏といふ二人の、貧乏な併し美しい娘があつた。黃氏は李仁本といふ大家へ奉公に上つたが、その主人の娘が時の天子理宗皇帝の弟、榮王與芮方に嫁ぐことになつたので、其儘お伴となつて榮王邸に入つた。所が榮王夫人にはつひに子供が出来なかつたのに、この下婢が反つて運よく男の子を生んだ。後に理宗皇帝崩じて皇子がなかつたので、甥に當るこの子が位を嗣いで天子となつた。これ度宗皇帝である。黃氏は天子の生母だといふので、隆國夫人に封ぜられた。片や、胡氏の方は萬安縣の丞の賈渉の妾となつた。賈渉の嫡妻は非常に嫉妬深かつたため、胡氏は男の兒一人を生み落すと間もな

く追ひ出されて了つた。この子の名は似道、字は師憲と云ひ、一人の姉があつたが、姉の方も果して嫡妻の腹であつたかどうかは分らない。兎も角その後、賈氏一家には非常な好運が向いて來て、父賈渉は淮東制置使に迄なつて、北境の兵權を握り、姉賈氏は天子理宗の後宮に入り、皇后になることには失敗したが、恩寵を專にして一人の女、開漢國公主を生んだ。理宗には外に子供がなかつたので、掌中の珠と愛で慈しんだから、その生母賈氏のおん覺えもいよゝめでたかつたに違ひない。弟の賈似道は父が残した有形無形の遺産と、姉の搦め手からの運動によつて、次第に重用され、後に太師平章軍國重事に任ぜられて、南宋の國運をその掌上に廻らすといふ迄になつた。所で賈似道が斯うして立身する間、生母胡氏は見るともなく零落してゐ

たが、幸に母子再會して、子似道が顯貴なるの故を以て、齊國夫人に封ぜられた。先の隆國夫人黃氏とは同郷の誼で、屢々禁中に迎へられ、寢處を同うして昔語りの懷舊に耽つたといふ。——話がこれ丈ならば、今古奇觀の一節の下手な紹介かと間違へられるかも知れぬが、本當の歴史は此處で芽出度し芽出度しにしては了はれない。寧ろこれが話の發端に過ぎないのであるが、讀者諸君には、南宋の社會なるものは、斯ういふ種類の婦系家族が繁榮し得る、よく云へば太平無事な悪く云へば情實萬能の社會であつたことを心に銘記してから先を讀んで貰ひたい。

二

賈似道が生れたのは、寧宗の嘉定六年〔213 A.D.〕八月八日であつた。當時父涉は萬安縣丞であつたが、とん／＼拍子に出世して、嘉定十二年には淮東制置使となり、賈似道も恐らく父の任所の楚州に伴はれたものらしい。此頃南宋の強敵、金は蒙古に攻められて、又昔日の勢威なく、淮東の前には流賊李全なるものが金より獨立し、蒙古と宋の間に立ち、兩勢力を利用

して自己の地盤を山東地方に確立せんとしてゐた。制置使賈涉は又李全を煽動して、金軍を牽制させ、度々金軍と戰つて、別に大なる勳功も立てなかつたが、又大なる失敗もなく、嘉定十六年、現職中に病死した。

時に一子賈似道は年十一歳、父の恩蔭を以て成年に達すると、藉田令なる官を授かり、嘉興の司倉といふ差遣を與へられた。所がこの頃世上では、父祖の餘德によつて官を得たといふのでは幅が利かぬ、自力によつて進士の肩書を獲た者でないと世人は尊敬しないのである。進士になるには科擧を通るものと、大學を出るものと二途あるが、何れも何度かの激烈な競争試験を通過しなければならぬ。所が矢張そこには一種の拔道があつて、大臣貴戚の子弟は免解と云つて、一切の豫備試験を免除して貰つて、最後の殿試だけを受けることが出来る。殿試は宮中にて、天子自ら試験官になつて行ふといふ儀式的な、芝居がゝつた試験で、此時には落第を出さぬから、免解を得れば進士になつたも同然である。恰も賈似道は、姉が容色の優れたる故を以て後宮に入り、天子理宗に寵愛を受け、立后の際には最も有力な候補者の一人であり、后位は、恐らく門地

の關係で謝氏に譲つたが、天子の愛は寧ろ賈氏に傾き、皇后より下ること一等の貴妃に立てられた。この姉の懇請によつて賈似道は免解の特典を與へられ、嘉熙二年の科擧に際して、他の讀書子と共に殿試を受け、無事及第して進士となつた。時に年二十六。最早子供でもないのだが、姉の貴妃はこの試験を心配して、試験最中に後宮から湯藥飲食を提供せしめたと云ふ、試験委員に對する示威運動の意味であつたかも知れぬ。

賈似道は、父祖以來相當の地位にあつて、家に可也の財産があり、其上に姉の賈貴妃といふ有力な保護者があるので、萬事思ふに任せぬことなく、次第に放埒に身を持ち崩し始めた。進士に及第してから、太常丞、軍器監といふ官に任ぜられたが、實際の職務はなかつたらしい。毎日妓家に流連し、夜になると西湖の上に船をのり出して大亂痴氣を極めた。天子の理宗がある夜宮中の高台から西湖を眺めると、湖面が非常に明るいので、「また賈似道の奴めが飲んでゐるな」と獨語して、翌日聞き訊すと、果してさうであつた。臨安府尹、史巖之を呼びつけて、今後を戒飾するやうに命じたが、史巖之は退出する際に云つた。「なに若い者のすること

です。賈似道はなか／＼の才物で、今にきつとお役に立ちませう。」

天子輦轂の下、臨安府は大運河と杭州灣の接合點にあつて、附近は唐以來有名な米穀の產地、其上に南宋の都となつてから、海陸の物資が此に集中するので、生活は安易なり、西に湖山の勝概を控へて、享樂の爲にあまり便利に出來すぎてゐる。若い者を此處で無爲に遊ばせておくのは面白くないと、天子理宗の考か、姉貴妃の指金か、兎に角賈似道は地方官に任ぜられて都から體よく追ひ出された。先づ知澧州を振り出しに、湖廣總領財賦に移り、應て淳祐六年〔246A.D.〕、名將孟珙が歿すると、その後を受けて京湖制置使の命を拜した。制置とは處置と云ふやうな意味の動詞であつて、制置使は唐ならば差詰め節度使に相當するが、節度使程大なる權限は有しない。別に總領財賦といふ官があつて財政を司り、制置使は兵馬を握つて國防に當る丈である。南宋の半以後には、北方金との國境に通常三制置使を置き、東の方から數へて、淮東（江蘇）、淮西（安徽）、京湖（湖北）、といふ順になり、四川には宣撫使を置いた。制置使の位の高いものは、制置大使、或

は更に安撫使、安撫大使を加へるが、職掌には別に變りがない。賈似道が京湖制置使に任ぜられた翌淳祐七年、姉の賈貴妃がまだ幼い皇女一人を残して病歿したことは、賈似道にとつて大打撃であつた。併し乍ら彼は嘗て京尹史巖之が豫言した如く、非常な才物であり、特に事務的才能に優れて、當時の無能なる學究的地方官の中にあつて、斷然頭角を擡んでゐたらしい。在任、四年の後、兩淮制置大使に移り、淮東、淮西を兼ね支配し、此頃金に代りて北支那を征服し、漸く南宋に對して壓力を加へつゝあつた蒙古に備ふる爲、國境線上の要地、寶應、東海、廣陵、渦口、荊山などに、次々に築城工事を施して、防禦線を強化した。之が理宗の意に叶つたと見え、寶祐四年には參知政事、同六年には樞密使の銜を與へられ、身は外閫にあり乍ら、宛然中央の宰相の待遇であつて、威權日に盛に、管内人事の進退に就いては、廟堂の大臣も賈似道の意向を無視して行ふことを憚る様な狀態であつた。斯くして兩淮を鎮すること十年、突如蒙古の大侵入が起つて、之に對する防禦の責に任じた賈似道の手腕が天下に認めらるゝの機會が來た。

三

南宋と蒙古との關係は、蒙古太宗が金の都開封を攻むる爲に、宋の領土を通過して兵を進めんことを要求したる紹定四年〔1231 A. D.〕に始まる。此時宋は蒙古の要求を拒絶したが、蒙古は之に頓著なく、宋の領土に闖入し河南の南方に現はれ、金軍の精銳を鈞州三峯山に包圍殲滅し、金都開封を脅して引上げた。これ紹定五年の正月より三月迄のことであるが、其年の暮に蒙古は再び宋に使を送り、金を夾攻せんことを提議した。金は都開封を棄て、宋の國境に近き蔡州に落ち延び、同じく宋に使を遣はし、蒙古の信頼するに足らざることを、寧ろ金を援けて蒙古の南下を防禦するの得策なることを説き、差當つて軍糧を供給せられんことを懇願した。宋の朝廷では大評定の揚句、遠交近攻の常套政策により、蒙古と同盟して瀕死の金を夾撃することに議定り、名將孟珙が兵を率ゐて北征し、蒙古の將塔察兒と協力して蔡州を陥れ、宿敵金を亡すことが出來た。〔宋端平元年 1231 A. D.〕

蒙古は宋と陳州蔡州を境と定めて兵を引上げたが、

當時の蒙古は猶内外多事で、且つ支那に對してあまり興味を有しなかつた時代であるから、黃河以南の新蒙古領は支那の降人に一任して、蒙古兵の駐屯する者は殆ど無かつたらしい。之を探知した宋側では無謀にも、兵を河南に進めて故都開封を恢復しやうと試み、全子才、趙葵の兩將が北征し、始は無人の境を行くが如く、開封、洛陽を占領したが、忽ち蒙古の塔察兒に襲撃され、全軍潰散して逃げ歸つた。幸にして蒙古は歐洲遠征を計畫して居つた最中であり、急に宋に對して大舉復讐には出でなかつたものゝ、北支の駐屯軍を動かして宋の國境を侵掠せしめたので、宋は宿將孟珙を起用して事態を收拾せしめた。孟珙はこの困難なる時局に面して、流石に南宋朝野の期待に背かず、襄陽を收復して第一線の根據地とし、前後十三年の久しきに亘つて、無事前線防衛の大任を果したのであつた。而して淳祐六年孟珙の卒するや、賈似道がその後繼者に任ぜられたことは前述の通りである。

この間に蒙古は太宗殂して定宗貴由の短き治世を経て、淳祐十一年大汗の位が拖雷の子孫なる憲宗蒙哥の身に移ると、蒙古の對宋關係に重大な轉機が齎され

た。蓋し久しく失意の境遇にあつた蒙哥家は、これ迄十分なる封地を與へられて居なかつたので、蒙哥が大汁の位に上るや、兄弟力を併せて新領土を開拓して、之を子孫の世襲財産となさんと企てた。憲宗の次弟忽必烈は支那・西藏の方面を委任され、三弟旭烈兀は鋒先を波斯に向けたのであつた。

忽必烈は後に世祖となる人であるが、蒙哥家不遇の中に成長した事は、彼をして、蒙古社會にて蔑視されがちな支那系官吏と親密ならしめ、一通りの漢文化の教養を治めてゐた。蒙古至上主義を以て征服地の人民に臨んだ、初期の蒙古諸王の中には珍しい存在で、漢人の子と綽名された。彼は兄蒙哥汗より漠南の軍事を一任されると、姚樞、郝經などの儒者を召し、史天澤、張柔の如き漢人出身の將軍を用ひて股肱とした。南宋がその敵手として、斯くの如き漢文化に理解ある蒙古公子を迎へたことは、和するにも戰ふにも、大いに警戒を要す可きことであつた。

忽必烈の幕中には親宋論者が多かつたやうである。忽必烈は最初彼等の意見に動かされて、宋との正面衝突を避け、その鋒を西方に向け、宋の四川國境外を通

過して、雲南に入り大理國を亡し、同時に西藏を招降し、一軍を出して兀良哈台を將として長驅安南を征服せしめた。安南王が蒙古の軍前に降つたのは憲宗即位の七年であり、翌年には憲宗自ら兵を率ゐて宋を征し四川に入り、忽必烈は京湖へ、兀良哈台は雲南より廣西へと三道より兵を進めて、鄂州(武昌)に會合する策戦計畫が立てられた。〔宋寶祐六年 1258 A. D.〕

憲宗の軍は最初に行動を起して四川に侵入し、嘉陵江に沿うて下り、長江流域に出ようとしたが、途中合州で喰ひ止められた。合州の守將王堅なる者、地の險を利用して防禦に力め、流石の蒙古軍も之を降すこと能はず、合州を通抜けて重慶を攻めんとした折も折、憲宗蒙哥汗は病に罹つて、合州釣魚山の營中に殂落した。これ宋の開慶元年七月二十一日のことである。

憲宗麾下直屬の軍隊は間もなく合州の圍を解いて引上げたが、南方より宋の背後を衝く可く命ぜられたる雲南の兀良哈台は、丁度この頃行動を起しかけた時であつて、如何に急使を派してこの行を中止させようとしても間に合はない。事實兀良哈台は七月盤江を渡り、邕州に入り、八月横山寨を破り、賓州、貴州を経て、

象州柳州を蹂躪し、九月二十二日には、靜江府の城下に迫つたのである。

一方忽必烈は兄憲宗より進撃の命を受け七月、蔡州にて勢揃ひをした上、淮水の上流を渡り、大別山脈の險要、大勝關を破り、黃坡に於いて揚子江に臨み、渡江の策を廻してゐた。而して憲宗崩御の報は早く忽必烈に達したがその後、九月一日になつて、穆哥なる者が合州城下より急使を派して憲宗崩後の諸將の動靜を傳へ、且つ忽必烈に勸むるに早く北歸して大汗の位を爭ふ可きを以てした。忽必烈としても大汗位相續に對して食指の動かざるにあらず、併し乍ら宋の背後に廻りたる兀良哈台の軍は既に宋の奥地深く侵入して居るので、若し之を放置して撤兵せんか、兀良哈台は進退據る所を失つて全滅に陥る懸念がある。且つ汗位繼承の内紛には、自ら野心を表明するよりも、暫く重兵を握つて局外に立ち、事態の推移を靜視した方が有利であるとも考へたのであらう。彼は親信諸王の懇請を退け、反つて陽邏堡より舟を鑿して大江を渡り、南岸の潯黃州に上陸すると、兵を進めて鄂州城を圍んだのであつた。時に鄂州城は宋軍の守備單弱あわや落城と見

えたが幸にして守將張勝善戰して蒙古軍を防ぎ、且つ四川より呂文德が手兵を以て入援し、賈似道も亦大軍を率ゐて應援に向ひ、此に鄂州城下に兩軍主力の對陣となつた。〔宋開慶元年 1260 A. D.〕

この間、宋軍は相當勇敢に戰つて蒙古軍を惱ました。その理由として考へられることは、第一に金の滅亡の後にその遺民が宋に亡命して居り、蒙古に對する敵愾心から奮戦力闘したこと。第二に宋の財政に餘裕あり、惜まずに軍費を支出したること、即ち開慶元年二月から翌景定元年の二月迄、丸一年間に特別に支出したる犒賞の費用のみにても銅錢一億六千八百萬緡、銀十六萬兩、帛十一萬疋に上る。更に第三としては、蒙古軍が本腰を入れて戰つたものでなく、兀良哈台の軍は原來が後方攪亂の爲の別動隊であり、忽必烈の本軍と雖も徹底的に宋を征服する意志は持たなかつた爲、自然に鋒先が鈍つたことも數へられよう。

兀良哈台の軍は湖南の全州、永州を経て、湘水に沿うて下り、十一月頃潭州迄來たが、潭州郊外の南岳市で宋軍と遭遇し、この戰で二哥元帥と稱する、恐らく基督教徒の色目人捏古來が流矢に當つて戰死した。忽

必烈の先鋒は既に岳州に達してゐたので、斥候を出して連絡を取り、互に動靜は察知出來たが、宋軍の抵抗と地形の不利の爲に、兀良哈台軍は北進を續けることが出來ず、一旦南方へ引返し、今度は湖南・江西の省境の山地を突破して江西の平野へ進出した。

忽必烈の方では一旦岳州の前面に現れた味方の迂回軍が、再び姿を消して行方知れずになり、一方蒙古の根據地では末弟阿里不哥の即位運動が愈々具體化して來るので最早猶豫出來なくなり、大將張柔に残置軍の指揮を命じて自らは輕騎を率ゐて北歸した。

兀良哈台軍が江西へ侵入したのは既に景定元年に入つてからの事と思はれるが、彼は守備薄弱なる宋の内地を蹂躪して、袁州、臨江軍、瑞州、奉新、分寧、武寧、江州、興國軍の各地を悠々經過して、無事本軍と合體した。只それより北歸するには揚子江を渡らねばならぬが、有力な水軍を有しない蒙古軍には之が大冒険である。蒙古軍はこれ迄對陣が長引くと、長江の上に浮梁を造つて江北と往來してゐたが、三月三日を期してこの危険なる浮梁上の退却を斷行しやうとした。河川を挟んでの戰には、敵軍が半ば渡る所を撃つのが

古來戰術の定石である。宋では水軍の將夏貴等が大艦を鑾してこの好機を待つて居り、蒙古軍の撤退開始を見すまし、浮梁を燒斷つて鏖殺戦を行つた。但し戰術の未熟な爲か、將た蒙古軍の善戦したる爲か、宋軍の獲たる首級は僅百七十人に過ぎなかつたが、兎も角、連戦連敗が常例であつた宋にとつては異常の成功であり、朝野を擧げて有頂天の歡喜に浸つたことには、十分に同情出来る。

この間、賈似道は京西・湖南北・四川宣撫大使、都大提舉兩淮兵甲、湖廣總領、知江陵府といふ長い肩書で、更に節制江西二廣人馬を兼ね、通融應援上流を命ぜられてゐるから、都の附近を除く外、南宋領土の殆ど全部が彼の指揮下に入つてゐた譯である。即ち彼はこの戰爭に對する全面的の責任者であり、功罪共に一人で負はねばならなかつた。彼は始め漢陽にあり、後に戰場の中心なる鄂州に入つて軍務を總督し、戰の終る頃になつて、對岸の黃州に移駐した。その途次に敵の敗殘兵に遭遇して之を破り、擄掠せられた若干の宋民を取戻し、此等は又誇大なる軍功報告となつて中央に達し、いやが上にも彼の武勳を赫々たるものにし

た。

四

理宗皇帝は原來、宋皇室の疎族で、寧宗が不慧にして子なきの際、皇子に取立てられ、時の權臣史彌遠にその端重なる態度を見込まれ、寧宗の崩後競爭者を排して位を嗣いで天子となつたものである。所が不遇の中にあつては好學恭儉の青年も、急に天子となつて富貴の境遇に置かれ何一つ思ふに任せぬことがなくなるゝと、根が生れつきの聖人でもないので、段々自制の繩がゆるんで來て、天晴れ一箇の道樂者となり了せた。殊に宰相史彌遠が亡くなつて、誰憚る者がなくなると、側近の宦者董宋臣等が重用され、先づ宮中に土木を興し、その爲に修内司といふ役所を立て、之が宮中を根據として外廷に干渉し出した。最初は單に政府から土木費を貰いで呉れゝば満足したが、段々費用が嵩んで來ると、政府の人事に容喙し、外戚宦官一味の者を地方官として派出し、其地方から直接、宮廷の費用を搾取しやうとした。朝廷の大臣は若し斯る要求を容れゝば清議の斥す所となり、無下に退ければ自己の位置を

保つことが出来ないもので、其の立場は誠に苦しいものがある。斯くして優柔不斷の謝方叔は朝を追はれ、董槐、程元鳳の中間内閣も永續せず、結局宦官勢力の代辯者たる丁大全が右丞相となり、硬論派は一時逼塞せざるを得なかつた。そこへ起つたのが上述の蒙古軍の大侵入であつたのである。

抑も忽必烈が何等水軍の準備なくして進軍し、容易に揚子江を渡ることが出来たのは、丁大全の失政が原因で、彼の登用した地方官が江畔の漁戸を浸削し、其地の土豪が之に憤激のあまり進んで蒙古軍の嚮導を勤めたるが爲であつた。而して丁大全は自己の非を蔽はんが爲に、由々敷き事態に立至る迄、蒙古軍の侵入を祕匿して、國家を累卵の危に陥れたといふので、磊々たる非難の聲に曝され、流石厚顔の丁大全も、挂冠して罪を闕下に待たざるを得なかつた。而して丁大全に代りて、戦時内閣の重責を負うたるは、硬論黨の領袖吳潛である。

吳潛は嘉定十年の狀元進士であり、當時漸く政治界にも姿を現して來た、弊衣破帽を誇る道學先生の錚々たるものであつた。彼は嘗て、道に違つて譽を求むと

いつて彈劾されたことがあつた程であるが、今年七十に近く、老いて愈々頑固に、朝廷より宦官派の政治家を一人残らず掃除せんものと決心を固め、徹底的肅清案を提げて朝に立つたのである。所が彼の悲壯なる決意に共鳴したのは、僅に若干の青年官吏のみであつて、一般廷臣は寧ろ、餘りに行き過ぎたる肅清は、其中に自分等をも累すに至るも知れぬと危惧し出したらしく、豫想外に冷淡な態度をとつて傍觀してゐた。一方では吳潛の計畫した朝臣の人事移動が未だ目鼻のつかぬ中に、血氣に逸る少壯官吏、國子博士以下五人が吳潛の仕方を手ぬるいとなし、凡ての禍亂の根本は宦官董宋臣にありとして、宮中の祕密迄も摘發せんといきり立つ、吳潛としても在野時代の抱負は、愈々廟堂に立つて見れば到底其儘實現出来ぬことに氣付き、彼の戦時内閣の前途には早くも一抹の暗雲が漾つたのである。更に困つたことは、由來天子の苦手は道學者であり、この場合も天子理宗が吳潛と少しもこまが合はない。蒙古軍が江西迄侵入して來た時、吳潛は天子に海上に避難することを勧めた。天子は不賛成である。曰く「朕が海上に去つたらば、卿は如何するか。」吳

潜曰く「臣は死力を盡して國都を防禦致しませう。」天子泣下りて曰く「卿は張邦昌の眞似をするのではあるまいな。」この天子の言葉は酷い言ひ方で「朕を賣るつもりか」といふと同じい。こんなヒステリックな激論が君臣の間に交されたが、更に立太子問題で最後の場面に到達した。原來理宗には皇子がない。そこで弟榮王與芮の子忠王を養子にしやうとしたが、道學者吳潜には、そのモダン振が氣に喰はない。「臣は史彌遠と違ひますし、忠王は陛下程運がよくはありません。」こんな事を言上してすつかり理宗の氣嫌を損じた。蒙古軍が全部撤退して、平和恢復の直後台諫側が吳潜の罪を彈劾する一方、夜半忽として免職の辭令が宮中より下り彼はその職を去らねばならなかつたのである。

然らば彼の後を繼ぐ者は誰か、實は天子と二三の朝臣との間には後繼内閣首班の膳立はすつかり出來てゐたのである。それは言ふ迄もなく、今度の戦争の大勳功者賈似道其の人に外ならなかつた。彼はこれ迄既に參知政事、樞密使・右丞相の肩書を加へられては居たが、實職は制置使乃至宣撫使であつて、國境軍隊の指揮官である。三軍を叱咤すること前後十五年、最後に蒙古

の侵入を防禦して、その手腕を天下に承認されたので、彼が中央に入つて相位を正すには何人も異存がない。只彼の宰相としての技倆は猶未知數に屬する。朝野は刮目してこの新宰相の采配振りを見守つたのである。

五

賈似道は開慶元年十月、既に軍中に就いて右丞相兼樞密使に拜せられ、翌景定元年四月、左丞相吳潜が罷めらるゝと直ちに、凱旋將軍として入京し、朝廷の首班に坐することゝなつた。此で一言す可きは、天子理宗との關係である。早くより天子は個人的に賈似道の人物を熟知して居り、姉賈貴妃は既に亡くなつてゐるとは云へ、その弟を信賴する情には變りがない。その賈似道が新に宰相となつたので、云はゞ何時も裏口より出入したる親類の子が、今度は來客になつて堂々と玄關より乗り込んだ如く、朝廷で初顔合せした君臣は、互に揆つたい氣がしたに相違ない。兩者間の意志疏通は、電氣の銅線を傳はる速度で行はれたことは推測に餘りある。この事は何といつても新宰相の絶對の強味であつた。

賈似道が先づ行はねばならぬことは、今事變に對する論功行賞及び軍規干犯者の所罰である。論功行賞の方は既に軍中に於いて大半を濟ませ、自己の後繼者として氣に入りの呂文德を京西湖北安撫使に据え、夏貴を淮東安撫副使として之を輔けしめることに定つてゐる。所罰の方は、これ迄は戰爭に敗けさへしなければ行はないのが常例であるが、長く軍中にあつて實情に通じ、且つ軍隊に對して睨みの利く賈似道は斷乎として之を實行し、以て軍規の肅整を計つたのである。文臣にして兵に將たりし、李曾伯、史巖之等はその退嬰贖職の故を以て官を褫はれ、武將は多く貪婪無規律にして、その部下を放つて掠奪を恣にしたる廉を以て黜退された。掠奪の名人、李虎の如きが死一等を減じて鬱林州に流されたのは當然として、相當に武功を立てたる向士璧、曹世雄等が免職されたる上、濫用したる軍費の辨償を強制されて能はず、遠州に貶竄せられたる如きは、人みな賈似道の偏頗なるを疑ひ、その苛酷に過ぐるを咎めた。併し賈似道に言はせたならば又已むを得ざる理由もあつたのであらう。

武人に對する肅清が徹底的なるに反して、中央の文

官官僚に對する彼の人事行政は寧ろ微溫的であつた。先に吳潛が反對派を一掃せんとして失敗したのに鑑み賈似道は反つて清濁併せ呑み、舊材料を其儘利用してそこに賈似道流の新體制を樹立せんとした。而して彼の目論見は、卓越せる彼の行政的手腕によつて略々完全に近く實現せられた。

當時官吏の數は頗る多くして實缺は甚だ少く、必然的に獵官運動が猛烈に行はれた。そこには宦官をも利用して恥ぢざる便宜主義者と、之を排撃せんとする硬論派との對立も生ずる。賈似道が若し一方を援けて一方を排すれば、宋代名物の黨爭が再燃激化する處がある。賈似道が覘ふ所は寧ろ從來の黨派の解消である。彼は一切既往を問はざることにして、官僚群を安堵せしめ、改めて彼に對する將來の助力を要請した。彼は獵官運動者には堅く門戸を閉じて請託を退け、一方禮を厚くして、隱遁的な學者の出處を懇請した。その遣り方が飽迄徹底して、世人をして以後獵官運動の爲には、山中に入つて坐禪をしなければなるまいかとさへ思はしめた。彼が禮を厚くして朝廷に招き、廟堂に立たしめたる馬廷鸞、葉夢鼎、江萬里の如きは何れも當

時に有名な學者文人であるが、元より宰相の器でもない、事務の才もない、云はゞ床の間の飾に過ぎないのであるが、賈似道は寧ろ、さういふ無能な點を見込んで同僚に選んだのである。賈似道自ら恬退の範を示さんが爲に、時々健康勝れざるを理由として辭職を願ひ出づれば、彼の同僚は暗夜に燈火を失はん心地して、争つて天子に上書して、周公去る可からずと云つて彼を慰留せんことを祈願する。賈似道更に恐懼して切に骸骨を乞はんとすれば、天子の慰撫愈々厚く、同僚の留任運動は益々白熱化する。七度八度押問答の後に漸く、留任を承諾すれば、天子も官僚も胸を撫で下して安堵し、其度に賈似道の官位は上り、威權は高まるのであつた。

軍閥を抑へ、官僚を抑へ、而も天子の信任隆重なる賈似道に對しては、宮中に巢喰ふ宦官、閥閥を誇る外戚宗室も頭が上らなかつた。否最も不思議なる現象はこれ迄、虎の如く猛く、何人も馴らす可からざる代物と思はれた臨安府下の學生群迄が鳴を潜めて、急に猫の如く従順になつたことである。由來都下の學生は鼻息が頗る荒く、何分にも聖賢の書を誦する身分といふ

矜持があるので、俗物の政治家共等は眼中にない。氣に喰はねば廟堂の宰相をも彈劾する。之を取締るのは臨安府尹の職務であるが、何分相手が學生となると、後難を恐れて手を出さぬ。政府と學生の間に挟まれ進退谷まつて辭職するのが、歴代の府尹の運命と定つてゐた。それが賈似道が一度學校を睨むと、これ迄兇暴を極めた學生群が魔術をかけられたやうに大人しくなつて了つた。然らば彼は如何なる祕訣を知つたか。別に面倒はない、只思想善導費を餘分に出す、學校の試験をらくにする、時々若い者をおだて上る、この位の事で當時の學生等は面白い程まんまと籠絡されて了つたのである。

六

此に一言せねばならぬのは賈似道の財政策である。

由來、南支那は一帶に米の産額が多く、殊に都の臨安附近は浙東、浙西の地で、古來米穀豐熟を以て鳴り、總體的には食糧は決して不足しないが、龐大な軍隊に供給する爲には租稅丈では十分でない。約六百萬石の米を毎年和糴と稱して實は強制的に買ひ上げるのであ

るが、之に支拂ふには會子なる不換紙幣を以てする。

斯くして年々不換紙幣が増發されるので、その價格は年々低落し、たとへ紙と墨で印刷するものでも、その分量が莫大な量になると、印刷費用丈でも馬鹿にならぬ。賈似道は新會子印刷の手数を省き、悪性インフレを抑制する爲に、一勞永逸の策として、公田買収に着手した。之は劉良貴等の献策によるもので、二百畝以上所有の大地主より其の三分の一を強制的に國家が買収し、之を小作人に貸與してその年貢を收め、和糴に代へて軍糧に供するといふ計畫である。賈似道はこの新政策に非常に熱心で、率先して自己の所有田一萬畝を授け出し、吝嗇を以て聞えた、理宗の弟榮王與内にも田を出させ、豫め反對論者の口を封じた。先づ浙西より買収に着手し平江、嘉興、安吉、及び鎮江常州江陰に官田所の分司を立て、各郷に官莊を置き、土豪を莊官に任じて、租米の徴収に責任を負はせ、後には莊官を廢して官吏が直接小作人を監督することにした。扱買収と云つても、政府が代償に與へたものは、不換紙幣の會子と、官吏の辭令書たる告身であつたから、沒收と相去ること遠くない。又官吏莊官が愈々租米を

徴する段になつて、意外に實收が少いと、貧乏な小作人を責めても役に立たぬので、原の所有主に不足分を辨償せしめる。之が浙西地方の地主連に大恐慌を惹起した。尤も地主の方にも罪があり、これ迄の大地主には、その經濟力を背景として非道な利殖を行つて來た者が多く、和糴のやうな負擔は成る可く之を小地主に轉嫁し、結局政府は今迄の和糴ではやつて行けなくなつた。そこで公田買上を始めると、彼等は慙と嶢峭な地を以て買収に應じ、或は面積を伴つて差出したので、租米上納の際にその不正が暴露したのである。結局は身から出た錆とは云ふものゝ、租米不足の辨償を督促せられて困却し或は自殺する者さへあつたといふデマも飛ぶ。賈似道の公田政策は地主階級に著しく不評判であり、而して地主階級の不平は直ちに響の聲に應ずる如く朝廷の輿論に反映する。そこで最初の豫定は全國で一千萬畝の田を獲て、六七百萬石の租米を徴する計畫であつたが、浙西に於いて三百五十萬畝の公田を獲た所で一先づ打切ることゝした。その租米は約二百五十萬石となる勘定であるが、この額はこれ迄の兩浙轉運使の和糴額に相當するから、浙西の公田丈で兩浙

の和糴を罷めても困らぬやうになつたのである。後に公田の租米を咸淳倉を立て、貯へたが、常に六百萬石の米がそこで喰つてゐた。

第二の政策は經界推排法といふ。之も主として富豪が賦税を誤魔化さんが爲、故意に田籍を紊亂してゐるので、檢地を行つて田籍を正したのであるが、官僚地主間の評判は益々よくなかつた。これより江南の地は尺寸の土にも税が課せられたと非難されたが、今日から見ればその方が本當なのである。凡そ斯る地主階級の好まざる政策は古來、大抵失敗に終るものであるが賈似道は之を斷行し、實施し、不思議に或程度迄成功した。以て彼の偉大なる統制力を見る可きである。

第三は金銀見錢關子の發行である。南宋時代の通貨は原則として銅錢本位であつたが、實際には會子なる不換紙幣が併行して用ひられた爲、銅錢は之に壓迫せられ、次第に流通界より驅逐せられさうなので、政府では銅錢と會子とを半分宛用ふ可しといふ様な命令を出し、平價の切下げを行ふと共に、會子の價格維持に力めたが、朝廷の財政困難が會子の濫發を促すと共に會子の價格は下落する一方である。南宋半以後、會子

價格の維持が、常に政治家の悩みの種であつた。賈似道は公田を買つて或程度まで和糴をやめ、會子の増發を喰ひ止めると共に、之が整理を企てた。當時第十七界、第十八界の會子が流通してゐたので、第十七界の會子の通用を停止し、新に見錢關子を發行した。之は銅錢の兌換券である。一體、交子、會子、關子、みな手形の意味であつて格別の差違はなく、最初は夫々兌換券であつたのが、何時の間にか不換紙幣となると、之と違つて兌換可能の新券を發行して別の名前をつけるのである。所で賈似道の見錢關子の一貫は、銅錢七百七十文に兌換し、十八界會子の三貫に交換する。結局十八界會子一貫は、銅錢二百五十七文と定められたのである。而して十七界の會子は、十八界會子を以て回收したが、如何なる比率を以てしたか不明である。

銅錢及び之を代表する會子の外に、當時銀が漸く流通力を増して大量取引に用ひられ、錢に代つて本位貨にならんとする勢であつた。そこで賈似道は、金塊銀塊の關子を發行して見錢關子と併せ用ひた。金と銀、銀と銅との交換比率が如何であつたかも、遺憾乍ら知るを得ない。扱各種の關子が發行された後、通貨は果

して安定したか否か、史の傳ふる所では、反つて益々物價騰貴して人民が苦んだとあるが、之も文字の儘には受取れない。其後十年程で南宋は滅亡し、この十年間の情勢を公平に傳へる史料は現今殆ど存在してゐないからである。

七

景定五年、理宗は寶壽六十歳、在位四十一年の長き治世の後に崩御して、弟榮王與芮の子忠王が即位した。度宗即ち忠王は先に賈似道が相位を正すと共に、その賛助の下に皇太子に立てられて居た。今即位の時は年二十五歳、別に幼冲といふには非るも生來不慧にして、學問よりも政治よりも、享樂を好む近代的青年であつた。而して賈似道より云へば最も與し易い天子であり、彼の地位を一層鞏固にするには好適な機會に恵まれた譯でもある。〔1264 A. D.〕

度宗即位の翌咸淳元年、賈似道は太師を加へ魏國公に封ぜられ、咸淳三年平章軍國重事に任ぜられ、私第を西湖の葛嶺に賜はり五日一朝の殊遇を與へられた。此に於いて南宋政府には二重體系が成立し、賈似道は

葛嶺の私第に於いて、館客廖瑩中と計つて庶政を裁決し、臨安朝廷の百僚は成を仰いで旨判を押し、兩所の連絡には堂吏翁應龍が當つた。

葛嶺の賈氏邸宅は西湖を俯瞰する形勝の位置を占め、園を集芳と名づけ、其中に半閑亭を立て、賈似道自ら半閑老人秋壑と號した。彼は文學にも疎からず、殊に美術を愛好し、良工を招いて定武蘭亭帖を覆刻したりした。その隨筆なる悅生隨抄は當時の隨筆文學流行の風を追うて、閑話を蒐録したものであるが、今は僅にその一部分が說郛の中に見出さるゝのみである。賈似道の骨董癖も亦當時の風潮に感染したものであり、相當の熱度の上つたらしい。園中の多寶閣の收藏を富まさんが爲には、世人の最も嫌忌する古墓發掘も厭はなかつた。彼は峻嚴に獵官運動を封じた事は前述の通りであるが人には弱點のあるもので、流石の彼も骨董を持ちこまれると、人事の上に或種の融通を利かせざるを得なかつたと云ふ。又蟋蟀を闘はすことが好きだつたと傳へられるが、この遊戲は今日でも支那に行はれてゐる。宰相と蟋蟀の取組は不似合であるが、それが即ち南宋末期の世風であつたのである。

咸淳六年には十日一朝を許され、賈似道と朝廷との關係は愈々疏遠になると共に、賈似道の權限は益々強化された。咸淳十年、賈似道の母胡氏が八十三歳の老齡を以て病死するや、天子は詔して特に朝を輟むる五日、内侍をして葬を護し、葬日天大いに雨ふつて百官泥濘の中に坐し、膝を没するも敢て動かなかつたと云ふ。併し乍ら亢龍悔あり、位人臣を極めて望月の缺けたるなきを誇つた榮耀も、聽て急旋直下、失意のどん底に轉落するの日が來た。而して彼の運命の逆轉は對蒙古政策の破綻より來たのであつた。

八

先に忽必烈の侵入に際して、賈似道が割地と歲幣を約して和を請ひ、忽必烈を欺きて撤兵せしめたる後、その約を果さなかつたといふ舊來の通説は眞實でない。鄂州の軍中にて和睦の交渉が行はれたのは事實であるが、之は寧ろ賈似道が蒙古の意向を探らんと誘ひの手をかけたと見る可きで、忽必烈もこの提議を眞に受けず、遂に和議は流産の儘、物分れとなつたのである。忽必烈は開平に歸りて自立して大元皇帝の位に

つき、東方蒙古帝國を建設し、略々曩日の金宋對立の形勢が再現すると、幕下の親宋論者郝經を宋に派遣し、新に宋に對し若干の要求を提出して、その反應を見んとした。賈似道は恐らく人心の動搖を慮り、且は國情を探知せられんことを恐れ、郝經を眞州に拘留して都に入らしめなかつた。

忽必烈がその政敵にして弟たる阿里不哥の勢を挫き、略々西北の騷亂を鎮定する間に、山東の漢人軍閥李璡が叛亂を起した。宋政府は別に何程の成算があつた譯ではないが、李璡の叛を聲援して、虎威を犯すの愚を敢てした。李璡は先に金末、流賊より起りて宋と蒙古との間に立ち、一獨立勢力を形成したる李全の子である。李全が宋軍に殺されし後、蒙古保護の下に舊部下を糾合して勢力を盛返し、山東に根を張り蒙古帝國内に漢人軍閥として生長した。それが策士王文統の野心に踊らされて叛旗を翻したが聽て蒙古軍に討平せられた。この事ありて以來、忽必烈の漢人に對する心境に一變化が認められた。彼は部下の漢人諸侯を警戒し出すと共に、南方に宋國が餘喘を保つ間は、決して漢人が蒙古の支配を謳歌せざる可きを悟つたのである。

李璫の叛亂は蒙古の戰術に對しても貴重な教訓を與へた。由來蒙古人は野戰に於いては天下に敵なき勇猛さを發揮したが、攻城となるとその鋒先は鈍つた。忽必烈の宋への侵入に際しても、長き對陣の間に遂に鄂州城を抜くことが出来なかつた。然るに李璫が濟南に籠城した時、元將史天澤は宋子貞の獻策を用ひ、敵城に對峙して此方にも環城を築き、包圍態勢を次第に壓縮して敵の死命を掣するを得た。即ち電撃戰一本槍の蒙古軍は、持久戰の要領を會得するに至つたのである。忽必烈は早速この新戰術を宋に對して應用した。

宋の前線は兩淮・京湖・四川であるが、其中京湖が最も要衝に當る。蓋し兩淮は沮洳地にして騎馬の進退敏活ならず、四川は中心より遠く離れて大勢に影響することが少い。されど若し京湖が破るれば宋の領土は中斷されて半身不隨に陥るのである。されば宋でも、精兵を京湖に集め、殊に前進基地たる襄陽の防備を堅固にしてゐる。宋にしてこの地點を確保すれば、たとひ蒙古軍が奇襲的に内地に侵入するも、總て兵站線の脅威を受けて、長驅戰果を擴大することが出来ないものである。襄陽は正に必爭の地であつた。

襄陽の守將呂文煥は、賈似道腹心の將呂文德の弟であり、呂文德は鄂州に鎮して、揚子江の中流を抑へ、京湖の軍事を總督してゐる。時に宋軍の驍將劉整なる者、賈似道と相容れずして蒙古に降り、襄陽を取るの策を獻じた。即ち呂文德に喰はすに利を以てし、襄陽と併立する要地樊城外に互市場を設け、互市場を保護するの名の下に簡單な防禦工事を施すの了解を得た。

南北の互市は、其地の繁榮を招き、之を支配する軍閥にも相當の副収入を齎すので、呂文德はうかと承諾したのであるが、樊城外の防備は知らず知らずの間に強化され、呂文德が氣のついた時は既に遅く、最早如何ともす可からざる堅固な城壁が出来上つてゐた。而して蒙古軍は権場を足溜りとして、襄陽樊城の周圍に要塞を増築して之を包圍し、完全に宋の援軍往來の途を遮斷して了つた。斯くて咸淳四年より、五箇年に亘る襄陽攻圍戰が展開したのであるが、其中に呂文德は病歿し蒙古軍が新武器回回砲を用ひて轟撃するに及び、さしも難攻不落を誇つた襄陽の守備も潰えて、咸淳九年二月、守將呂文煥以下、城門を開いて出降した。襄陽なき宋の防禦は、セダンを突破されたるマヂノ線である。

あつた。

宋の咸淳十年、元の至元十一年七月、忽必烈は名將伯顔に十萬の軍を授けて南宋討伐の總帥を命じた。伯顔は宋の降將劉整をして兩淮に向ひ、宋軍を東方に牽制すると共に、猛將阿朮を前鋒として京湖に侵入し、漢水に沿うて南下した。阿朮はかの兀良哈台の子、先の襄陽攻圍戰は彼の指揮下に行はれたものである。冬十二月、阿朮の軍は揚子江岸に達し、宋の水軍の眼を掠めて南岸に渡り、早くも鄂州城を占領した。此時蒙古軍は豫め漢水に於いて訓練したる水軍あり、今又宋の鹵獲艦船を以て、強力なる水軍を組織し、瞬く間に臨安進撃の體勢を整へたのであつた。

明くれば元の至元十二年、宋は度宗崩後を受けて、子少帝の立ちたる徳祐元年、蒙古軍は揚子江の兩岸に沿うて、江中の水軍を保護しつつ、破竹の勢を以て東下した。斯かる危急に直面して宋朝廷の對策は如何。否、宋朝廷には時勢の見透しと、前線の情報を取捨し得るものは賈似道以外にない。然らば賈似道の戰略は如何。

思ふに歐亞大陸を蹂躪したる百勝の蒙古軍の前には

如何なる國家も、その生存の權利を主張貫徹し能はなかつた。襄陽の陷落によつて賈似道は恐らく、國家の前途は既に奇蹟を恃む以外に救ふ可きものなきを覺悟したのであらう。而も彼は表面飽迄平靜を装ひ、退敵の祕策は彼の方寸にあるものゝ如く世人をして信頼せしめた。

賈似道は兎も角も蒙古の侵入軍を安慶附近に於いて一支へ支へんが爲に沿江の海船を驅集め、揚子江を溯つて軍を進めた。然るに安慶の守將范文虎は呂文煥の婿であり、舅の檄を奉じて元軍に降つたので、賈似道は已むなくその艦隊を蕪湖に留めた。淮西の老將夏貴江淮の將汪立信等來り會したが、江中の艦船は殆ど蒙古軍の鹵獲する所となり、賈似道の率ゐたる海船は、揚子江中にては進退共に甚だ不便であつた。蕪湖に於いて賈似道は最後の希望を抱いて、敵將伯顔に和睦を提議したが、伯顔は無條件降服を要求して、取り合はなかつた。蒙古水軍と、蕪湖附近の丁家洲に於いて、遭遇した賈似道の軍は大敗して奔竄した。賈似道は今更朝廷の百官に會はす可き顔なく、淮東の李庭芝の許に走り、表を朝廷に上つて罪を謝し、併せて天子が一

時艦隊に乗り込んで海上に避難せんことを勧告した。

臨安にて賈似道の留守を預りたるは、武將としては殿帥韓震、文臣としては賈似道の腹心陳宜中であつた。陳宜中は賈似道の黨派と認められんことを恐るゝあまり、故意に賈似道の意向に逆らひ、海上行幸の議に反對し、之を決行せんことを固執したる韓震を宮中にて暗殺した。斯かる危急存亡の秋を目前にして惹起されたる陰謀内訌は、百僚將士の團結を解體せしめ、臨安府は名狀す可からざる混亂に陥つた。

狀元出身の少壯官吏文天祥は、故郷の江西にて兵を募り、山間の峒丁二萬人を引率して都に出で、張世傑等の武將と共に殘軍を糾合し、城を背にして蒙古軍と一戦を交へんと息捲いた。而も軍隊は兵甲を棄て、逃亡する者相繼ぎ、之を補はんが爲に街路に於いて強制徵募が行はれる。敗兵は四出して行旅を劫し、正規軍の中でも混亂に乗じて掠奪を行ふものあり、張世傑の部下最も横暴と稱せられた。

朝廷の台閣に列したる宰相執政以下の高位高官は、時勢非なりと見るや、一人逃げ二人逃げ、夜陰に乗じて都を落ち、陳宜中も亦その例に洩れなかつた。六歳

の少帝を擁したる太皇太后謝氏は、無用の抵抗が形勢を挽回するに益なきを見て、無條件降伏の決意を定めた。徳祐二年正月、宋帝は臣と稱し、傳國璽を上つて伯顔の軍門に降つたのである。〔1276 A. D.〕

九

吾人は更に、丁家洲敗戦後、宰相の位を褫はれたる一平民賈似道の運命を語らねばならぬ。敗報が一度臨安に傳はるや、これ迄賈似道の味方であり、腹心であり、股肱であつた臣僚は悉く、彼の敵となり、讐々として彼の責任を問ひ、彼の既往の行事に溯つて彈劾し、或は賈似道に不臣の兆ありとし、之を極刑に處す可しと論ずる者もあつた。彼等は斯くして賈似道との過去の因縁を拂拭出來ると思つたのであらう。併し太皇太后謝氏は三朝の舊臣賈似道に同情があつた。太后は詔して賈似道の官を免じ、之を漳州に流すに留めた。監押の武臣鄭虎臣はもと賈似道に銜む所あり、配地漳州に至るや、木綿庵に於いて憐む可き六十三歳の老翁を拉殺した。或は之は賈似道の再起を最も恐れたる陳宜中の指金であつたかも知れぬ。といふのは鄭虎臣は臆

て陳宜中によつて死に處せられたが、自らの罪迹を晦まさんが爲に其の同類を殺すのはよくある手なのである。

賈似道によつて籠絡され、重用され、最後に賈似道を見棄てたる南宋の大官連は、或者は元に仕へ、ある者は著述を残して、相變らず賈似道を譏罵して、宋滅亡の責任を彼の一身に負はしめんとした。而して現今の宋史は彼等の門流の手になるものである。更に賈似道を責むるの酷なる、明人に若くはない。明人の編纂せる宋史紀事本末卷百二に「賈似道既に相となり、外戚の子弟を引いて、監司郡守となした」と書いたのは宋季三朝政要景定元年の文を引き、不の字を削つて全々反對に書きかへて捏造したるもの、吾人は啞然として云ふ言葉を知らず、餘りに陋劣なやり方は、公正なる讀者をして義憤をすら發せしめる。

流石に明君世祖忽必烈の胸中には、敵味方に關せず

公平なる觀察と正義感とが疊みこまれてゐた。嘗て諸臣を會して酒宴を開き、そろ／＼酔が廻りかけると、鬱勃たる彼の正義感が脈を打つて動いた。彼は並みゐる宋の降臣の武將達を見渡して云つた。「卿等は何の思ふ所あつて宋を去つて朕に降つたか云つてみよ。」それで一人が答へた。「宋では賈似道が專横を極めて、偏へに文臣を最負して臣等を侮蔑し、一向に臣等の意見を尊重しなかつたからで御座ります。」さもあらんといふ顔をした忽必烈は眼を光らして云つた。「成程賈似道といふ奴も悪いが、併し氣の毒なのは宋の天子だな。お前達もお前達で、よく何の罪もない主人を裏切つて逃げる氣持になれたものだ。若しこれからもそんな了見でゐると、この俺までが賈似道のやうにお前達を馬鹿にするぞよ。」たとひ相手が萬乗の天子でなくとも、宋の降將等には返す言葉が無かつたに違ひない。